繰り返される「競技場問題」

五輪計画を二度構想した建築家・岸田日出刀からの問い

松隈 洋

まつくま・ひろし　建築史家、京都工芸繊維大学教授。一九五七年生まれ。DOCOMOMO日本支部代表。著書に『残すべき建築』（誠文堂新光社）、『建築から都市を、都市から建築を考える』（聞き手、岩波書店）ほか。

右上――自ら撮影した岸田日出刀の肖像写真（以下、特記しないかぎり写真は岸田比呂志氏所蔵）
上――1936年8月1日、国立競技場でのベルリンオリンピック開会式に入場するヒトラー（中央）
下――閉会式の演出

「白紙以後」の競技場問題

迷走を続けていた新国立競技場の建設計画は、二〇一五年七月一七日、「白紙撤回」という安倍晋三首相の決断によって振り出しに戻った、と思われた。

だが、その仕切り直しの整備計画は、新たに設定された工事費上限値の一五五〇億円から逆算して導き出されたのか、可動屋根と可動席の中止という僅かな変更にとどまった。施設規模も約一割減らされただけで計画敷地も縮小されず、建物の高さも見直されることなく、そのままの枠組みで進んでいる。

新国立競技場をめぐっては、二〇一二年の国際デザイン・コンクールで選ばれたザハ・ハディド案の奇抜さと二五二〇億円に跳ね上がった工事費ばかりが取り沙汰された。しかし、そもそもなぜこれほどの施設が必要なのか。誰がどのような専門的な検討を経て決定したのか。それが一〇〇年前の人々が都市の公共空間として築き上げようとした明治神宮外苑

競技場に入場するヒトラーと国際オリンピック委員団。右上には『民族の祭典』を撮影するレニ・リーフェンシュタール監督らが写っている。

定　神宮外苑案は不適当」という見出しで、次のような指摘と警告を行ったのだ。

「現在までの東京における計画では明治神宮外苑の今の陸上および水上競技場あたりを中心とする案だけが論議されているが、端的に私の意見を述べれば、この案は決してよい案とは考えられない……問題は如何なる土地を敷地と選定するかにある、私は一つの案として恰好の土地を考えてはいるが、勿論今はそれを発表する時期ではない、土地さえ理想に近いものが決まれば個々の競技場等は比較的容易に最善のものが計画できるであろう、反対に敷地の選定を一歩誤ればあらゆる個々の競技場計画はうまく行かず、従って全体としてもオリンピック競技場としての使命を果すことが出来ないであろう」

また、この一般紙に先立ち、岸田は、九月七日付の『帝国大学新聞』にも、「中心の競技場は外苑以外に敷地を」と題した文章を寄稿し、「現在の明治神宮外苑競技場の位置が最善唯一のものとは到底考えられない」として、次のような意見と抱負を書き記していた。

「今私が頭で考えている敷地にオリンピック中心競技場が建設されるならばすべてがうまく計画されると確信している。……どこどこの位置と明言する時期ではない。……伯林（ベルリン）大会を視察調査した建築家としての私の意見を徴される機会があるならば、その時に私の理想案を提示し、それの実現に努力したいと思っている」

現地で記したこの言葉どおり、岸田は、一九三六年一〇月に帰国すると、ただちに、「明治神宮外苑オリンピック大会々場不可」論を展開していく。その端緒となったのが、一二月に自主的に作成し、関係者へ送付したと思われる、「東京オリンピック大会々場に就て」と題する意見書の小冊子[*1]である。これは、後に組織委員会の構成団体の一つである大日本体育協会の機関誌『オリンピック』一九三七年二月号に掲載されるが、岸田はその中で、「明治神宮外苑会場案を技術的立場から再検討し、其是非を批判し、更に私の最も適当と考える会場に対し忌憚のなき所見を披瀝したい」と述べ、明治神宮外苑会場案の問題点として、「敷地面積の狭隘」、「外苑神域の風致を害する」とともに、「現在のスタンドを如何にするか」という項目を挙げて、次のように主張した。

国立競技場の外観。全長300m、幅230mの楕円形。トラックからの高さは30mだが、半分地下に埋まっているので外観の高さは15mに抑えられている。

「今の神宮外苑競技場は、あれはあれとして立派にまとまった且つ由緒ある競技場である。それを惜し気もなく捨て去ることは情に於いて忍びないのみならず、而も新規に造られるものは敷地の関係上完全なものが出来ないというのでは、理論上から言っても納得出来ないことである」

こうして、岸田は、明治神宮外苑会場案の根本的な問題点を指摘した上で、この意見書の最後で、次のような踏み込んだ提言を行う。

「オリンピック東京大会の開かれる一九四〇年は、恰も皇紀二六〇〇年に当る記念すべき年である。明治神宮外苑を大会々場にすることの重大なる根拠が茲にあることは私も充分よく理解することができる。然らば明治神宮外苑以外にかかる精神的願望を満足し得る敷地が他にないであろうか。

代々木練兵場！」

こう記した一九三六年一二月の時点で、岸田は、組織委員会に設けられた会場敷地の調査委員会の委員であった。しかし、中間報告として組織委員会にメイン会場の候補地が報告されるのは、一九三七年一月である。この経緯からすれば、岸田の行動はかなりきわどい綱渡りになる。そして、心配された通り、「代々木に就ては軍部において譲渡絶対不可能と言明ありたり」（『東京朝日新聞』一九三七年一月一五日付）と、代々木練兵場案は即座に却下されてしまうのである。それでも、岸田はあきらめなかった。ベルリンで気づいた視点への確信と、やはり組織委員会から依頼されて、明治神宮外苑競技場の改築案の作成を、一九三五年に事務所を設立したばかりの教え子の前川國男に担当させて、具体的な検討作業も行っていたからである。一方で、岸田は、建築家としての立場から、ベルリンオリンピックの施設について、次のような冷静な評価も下していた。

「諸建築物を見るに、何れも規模宏壮にしてその意匠は豪快なものであったにはちがいないが、忌憚なく評すればその表現は些か鈍重の気味があり、明朗にしてスピーディなものの表現に欠けていた嫌いがある。……無味乾燥にして人間性というようなものはそれらの建築の表現を通して少しも感得することはできない。そこには歪められた強制と統制とがしつこくのさばっているだけだとしか思えない。……独逸（ドイツ）の建築は独逸の建築として馬車馬のようにまっしぐらにナチス一色化に進みつつありの感を深くした」（岸田日出刀

「オリンピック大会と競技場」『改造』一九三七年三月号）

こうした視点を岸田が持ち得たのには理由があった。一九三三年春に来日し、『ニッポン』（明治書房、一九三四年）や『日本文化私観』（明治書房、一九三六年）などの著書で、日本の建築文化を礼賛したドイツ人建築家のブルーノ・タウト（一八八〇～一九三八年）と交友があり、岸田が後に記したタウトの追悼文（『帝国大学新聞』一九三九年二月六日付）では、一九三六年の「六月始めの或暑い日にひょっこりと私の研究室に現れ、オリンピックにドイツに行くそうだから友人宛の紹介状を書いてきた。会ったらみんなによろしく頼むと四五十枚の名刺を渡してくれた。それが彼と会った最後である」と記すように、現地ベルリンで彼の息子や友人たちと接していたからである。また、同時期の別の文章では、東京の競技場敷地選定の難しさについて、次のような指摘も行っていた。

「競技場調査に当り、痛切に感じたことは、東京市内の空地難ということであった。……伯林にかように豊富な自由空地があるのは、土地の大部分が市有である関係からだが、東京にはこの官有又は市有の土地というものが至って少なく又少しあっても空地として残されている部分が極めて少なく、ために十万坪のオリンピック競技場敷地を求めるのにこうした苦労もしなければならぬ始末である。……土地が金であるところに競技場敷地難の根本がある」（岸田日出刀「競技場候補地調査所感」『オリンピック』一九三七年三月号）

そして、岸田は、さらに論点を整理し、満を持して建築学会の機関誌『建築雑誌』一九三七年五月号に、九頁にわたる論考「第一二回オリンピック東京大会会場論」を寄稿する。その前言には、「今日までの経過並に本問題に関する私自身の主張なり理想を本誌上に発表することは、本会々員としての責務と感じ、更に将来のために何等かの参考資料となることと思い」と記されていた。そして、その中で次のような次善の候補地を挙げた。

「新たに大総合競技場を建設すべき地はどこか。代々木練兵場又はその一部は理想の地であるが、軍部の都合により全く望みが断たれた今日としては、私は第一に駒沢ゴルフ場を推すに躊躇しない」

この予言めいた言葉どおり、翌年一九三八年四月の土壇場になって、組織委員会は、「明治神宮外苑競技場は観覧席の収容力を六万人以上に拡大することは不可能」として、「主競技場を駒沢に建設すること」を決定する。[*2] この変更の背景には、もちろん明治神宮外苑を管轄する総務省神社局からの強い抵抗があった。それでも、岸田の理論的な主張がなければ、この変更はあり得なかっただろう。こうして、駒沢にメインの競技場の建設が決まり、その設計が東京市で進められていく。しかし、日中戦争下の情勢悪化を理由に、七月一五日、オリンピック開催中止を閣議決定し、一九四〇年のオリンピック東京大会は幻に終わった。

岸田日出刀の戦後

戦後に入っても、岸田の態度は一貫しており、変わることはなかった。さらに、あらかじめ平面図が決められ、「日本趣味を基調とする」などの様式を規定された中で、外観のデザインだけを募り、当選者には著作権も与えられていなかった戦前の設計競技の在り方を根本的に改善すべく、「建築設計競技執行基準」（一九五七年）を制定する委員会を組織し、委員長を務めた。また、優れた建築を表彰するために、日本建築学会に作品賞を創設（一九四九年）するなど、建築文化の向上に大きな役割を果たし続けた。

そして、一九六四年に実現することになった東京オリンピックでは、組織委員会に一九六〇年に設けられた施設特別委員会の委員長として、オリンピック施設の敷地選定から設計者の指名までの全権を委嘱される。ここで岸田は、幻のオリンピックでメイン会場の候補地として筆頭に挙げた代々木練兵場の跡地に、丹下健三を設計者に指名して、国立屋内総合競技場を完成させる。また、メイン会場の最終候補地だった駒沢には、オリンピック公園を整備する。

しかし、その一方で、戦前にあれほど岸田が守ろうと尽力した明治神宮外苑競技場は、一九五八年に、建設省関東地方建設局の角田栄の設計により、オリンピック招致の前哨戦として開催が決まったアジア競技大会のメイン会場として、景観に配慮しつつも、国立競技場へと建て替えられていた。さらに、一九六四年のオリンピック開催に合わせて観客席が大きく増築され、絵画館側に巨大なスタンドが立ち上がってしまった。

なぜ岸田は声を挙げなかったのか、理由はわからない。また東京オリンピックの各施設の設計者をコンペなどの公開された方法ではなく、特命で選んだことにも批判がある。だが岸田は、進駐軍に接収されてワシントンハイツと呼ばれる宿舎が立ち並んだ元の代々木練兵場の日本への返還にあたり、それを公共的な都市公園として整備することを最大の目標に掲げた。だからこそ、この敷地に突如割り込んできたNHK放送センターの建設計画に対しては、戦前と同じく、次のような意見書を「施設特別委員長」名で各所へ配付したのである。

「ワシントンハイツの地には、何等の建築的な諸施設はこれを設けないで、広々と緑地としていつまでも保有することが、東京都百年の大計の上から望

1964年第18回オリンピック東京大会の開会式を迎えた東京国立競技場（10月10日、写真：共同通信社）

ましい。……私はNHKテレビセンターがワシントンハイツの一廓に建設されることに対し、声を大にして反対する。……それはオリンピック選手村を不完全なものとし、オリンピック後の森林公園という遠大な理想案がくずれ去る端緒をつくるものであり、更にそれはあまりにも自己本位の計画案である」（岸田日出刀「NHKテレビセンターのワシントンハイツ内建設計画に就いて」、「岸田日出刀」編集委員会編『岸田日出刀』相模書房、一九七二年）

また、東京オリンピックの開会式直前に行われた座談会でも、このことに触れて次のように述べていた。

「オリンピックがすめばあそこの二〇万坪を、東京都は森林公園にするという計画だったのです。緑のない東京にあれだけの緑の公園ができるというのは大へんけっこうなことだ。その大事な二〇万坪の中の三万坪をNHKが取ってしまうというのはもってのほかだね。……わたくしの反対は正式に文書として各新聞社にもくばり、けっしてあいまいでないんです。はっきりと、わたくしの意見を印刷してくばった。それに対して建築学会や他の言論機関がなにも反応を示さない。……何十年かあとにきっと問題になるね。オリンピック東京大会の前にNHKはオリンピックを錦の御旗にしてこんな横暴をした。当時の建築家はなにをしていたのか、なにもいっていないじゃないか——そういわれるのをぼくは残念に思ったからです」（「座談会オリンピック施設計画を展望する」『新建築』一九六四年七月号）

建築界の社会的な責任

新国立競技場はこのまま建設へと突き進むのだろうか。ここで問われるのは、三万五千名余りの会員数を擁し、「わが国建築界においてつねに主導的な役割をはたしてきた」と自認する学術団体の日本建築学会の沈黙である。

なぜなら、日本建築学会は、「倫理綱領」として、「それぞれの地域における固有の歴史と伝統と文化を尊重し　地球規模の自然環境と　培った知恵と技術を共生させ　豊かな人間生活の基盤となる建築の社会的役割と責任を自覚し　人々に貢献することを使命とする」という目標を掲げ、「行動規範」には、「本会会員は、学術的な中立性を基本とし、自らがかかわる専門の分野における公益性のある情報の共有に努め、積極的に社会へ発信する」と明記されているからだ。

しかも、その「専門の分野」には、構造、建築史、環境工学、都市計画、地球環境など、新国立競技場の議論に欠かせない学術的な領域をカバーしており、社会がそれを求めていることは明らかだ。

しかし、今回の問題が顕在化して以降、現在に至るまで、何ら見解も示さず、意見書の提示も行っていない。ここに露呈しているのは、二〇一一年三月一一日以降に原子力発電所を巡って顕在化した専門家団体の社会的信用の失墜と同じ構図である。そして、気が付けば、問題点を指摘して声を挙げたのは、槇文彦や作家の森まゆみ、森山高至ら、後ろ盾を持たない個人であり、本来、自らの領域の問題として議論を集約し、より良い方向性を提言できる使命を担うはずの学術団体が、まったく機能していないのだ。

この問題は今もなお現在進行形である。二〇一三年一一月七日、槇文彦の呼びかけによって文部科学大臣に提出された「新国立競技場に関する要望書」には、次の三点の要望事項が掲げられていた。「外苑の環境と調和する施設規模と形態」、少子高齢化という「成熟時代に相応しい計画内容」、そして、計画内容を詳細に公表する「説明責任」である。しかし、「白紙撤回」以降の仕切り直しとして実施された今回の公募は、これらの要望に沿うものでは全くなく、施設規模の見直しもほとんど行われていない。しかも、私たちの目の前には、その審査員に先の要望書の賛同者であった建築家の香山壽夫と工藤和美が加わり、応募者は要望書の発起人の隈研吾と賛同者の伊東豊雄であるという現実がある。因みに、二つの応募案の大きさはベルリンの国立競技場より一回り大きい程度だが、高さは三倍を超えており、敷地との不釣合は著しい。

ここには、岸田が困難な状況の中で一人果たそうとした、建築の専門家としての社会的責任の自覚も技術者としての倫理も読み取ることはできない。また、私たちは、公共的な空間を守り育てることにあまりにも無自覚なのではないだろうか。そんな中、岸田が議論の渦中にあった日中戦争直前の一九三七年四月に記した次の文章が、切実な印象で迫ってくる。

「オリンピック東京大会のための総合競技場として神宮外苑の今の競技場地帯が数多くの事情から適切でないという私の持論は今以て変りはない。……競技場問題の紛糾は、決して私一個人の投げた理想論の故ではない。オリンピック競技場として本質的に不適当な神宮外苑なるものに拘泥するからで、そこに幾多の無理と不合理が起るのは当然である。現在見る諸種の情勢はあまりにもすべてが打算的である。然もその打算たるや、遠き慮りなきもの、必ずや近き憂いを招くであろう。……神宮外苑に拘わる所論が三年後を目標としているに反し、この私の主張は約その十倍位の遠い将来を目標とする」（岸田日出刀「改造案は不満　精鋭で当れ」『東京朝日新聞』一九三七年四月一二日付）

国土交通省が公表した人口推計によれば、オリンピック終了後五〇年となる二〇七〇年には、わが国の人口は約七〇〇〇万人に減少し、高齢化率も四〇％を超える。この時、新国立競技場は果たして健全な状態で使われているだろうか。求められるのは、次世代へ持続可能なより良き環境を遺すための未来への想像力と責任だと思う。岸田の投げかけた未来への問いかけは、これからも新国立競技場の在り方を照らし続けるに違いない。

＊1　東京都公文書館に収蔵されている内田祥三資料に、マル秘と記されたこの意見書が存在する。

＊2　永井松三編『第一二回オリンピック東京大会組織委員会報告書』一九三九年